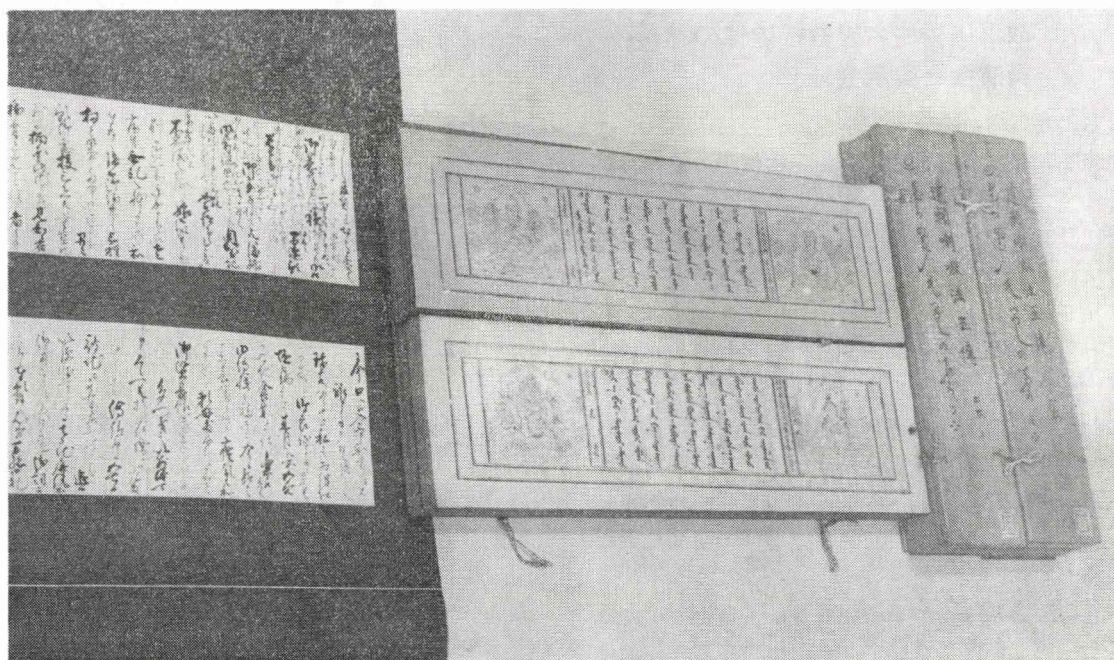


Title	京大広報 No. 224
Author(s)	
Citation	京大広報 (1981), 224: 167-172
Issue Date	1981-11-15
URL	http://hdl.handle.net/2433/209462
Right	ファイル中には未許諾による非表示部あり.
Type	Others
Textversion	publisher

京大広報

No. 224

京都大学広報委員会



文学部文学科所蔵 近松門左衛門書簡と蒙古語文献—関連記事本文 170 ページ—

目次

故湯川秀樹名誉教授追悼の講演会と展示会……………	168	〈紹介〉	
理学部・瀬戸臨海実験所水族館第2水槽室の 増改築工事が完成……………	169	文学部文学科……………	170
〈昭和56年度京都大学市民講座 講演要旨Ⅱ〉		学術講演会の開催……………	171
風景の文化—都の名所— 吉田光邦……………	169	計報・日誌……………	171
教育の底にあるもの 蜂屋 慶……………	170	〈随想〉	
		高槻時代の化研 名誉教授 後藤廉平……………	172



故湯川秀樹名誉教授追悼の 講演会と展示会

基礎物理学研究所と理学部は、去る9月8日に逝去された本学名誉教授湯川秀樹博士の追悼行事として、講演会と展示会を開催した。

10月31日午後1時30分から、農学部大講義室で行なわれた講演会は、予定を2時間近く超過して午後5時50分まで続き、会場外へビデオ中継を行なったにもかかわらず、多数の聴衆が最後まで立ったままという盛会であった。

会場には白菊と白百合にかざられた湯川博士の遺影がかかげられ、山口昌哉理学部長の開会挨拶に続いて、全員の黙とうと沢田敏男総長の挨拶があり、プログラムにしたがって追悼の講演が行なわれた。

牧 二郎基礎物理学研究所長は、博士の生涯にわたる幅広い業績を展望し、田中 正理学部教授は、博士が建設した中間子論とその後の素粒子論の発展についてくわしい解説を行なった。引き続き、6人の講師がそれぞれ湯川博士の思い出を語った。まず貝塚茂樹本学名誉教授は、兄としてみた博士を、小堀 憲本学名誉教授は、旧制三高と本学における同級生の立場から、また谷川安孝神戸大学名誉教授は、大阪大学時代の博士を、井上健教養部教授は、本学理学部と基礎物理学研究所における博士を、そして林 忠四郎理学部教授と福留秀雄理学部助教授は、それぞれ博士の学際領域に対する強い関心と、未知の分野の研究育成にかけた熱意について語った。最後に佐藤文隆基礎物理学研究所教授が閉会の辞を述べて講演会を終了した。

これらの講演は、記録としてまとめられる予定である。

一方、10月30日午後3時から、基礎物理学研究所の1階サロンにおいて、展示会が開かれた。ここでは、16枚のパネルと、博士の遺品、すべての著書が展示され、そのほかに主要著書と博士の業績やノーベル賞受賞を

伝える新聞コピーを手にとって見られるようにしビデオテレビが生前の博士を映し出していた。

60枚の写真、解説及び博士自身の言葉で構成された16枚のパネルが展示され、それらは博士の生いたち、中間子論建設、非局所場理論、ノーベル賞受賞、基礎物理学研究所の設立とその諸活動、博士が創刊し死去するまで代表者であり編集長であった月刊学術誌 *Progress of Theoretical Physics*、エピソードと交友、素領域理論、Russell-Einstein 宣言への参加、Pugwash 会議、科学者京都会議、世界連邦の活動など平和問題への献身、博士の発言と著作リストを示すものであった。展示された遺品は、ノーベル賞賞状とメダルの写真、中間子論の講演原稿、わら半紙に書き込んだ計算、手書きの論文原稿とこの論文が掲載された日本数学物理学会誌、講義ノート、著述原稿「荘子の現代的意義」、短冊、色紙、皿絵などであった。

展示会は、当初31日午後5時までの予定であったが、入場者が非常に多かったことと、講演会の終了が遅れたこともあり、午後7時まで延長された。それでも熱心な多数の入場者がたえずあり、入場をしばらく待たなければならないこともあった。

展示したパネルは、今後希望があれば貸出しをおこなう意向である。

今回の追悼行事に対し、湯川家、大学当局、農学部などから多大の協力をいただいたことに関係者一同深く感謝している。

(基礎物理学研究所)
理 学 部

理学部・瀬戸臨海実験所水族館 第2水槽室の増改築工事が完成

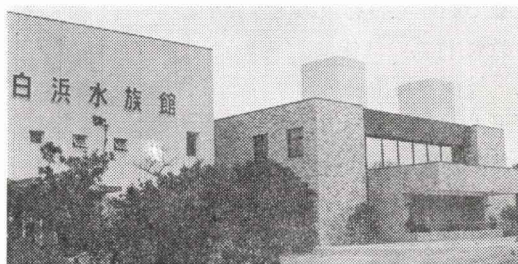
理学部・瀬戸臨海実験所では、大正11年創立当時の建物である第2水槽室の増改築工事が完成し、10月28日（水）、澤田 徹事務局長はじめ和歌山県当局及び地元からの来賓約70名の出席を得て、落成披露式を挙行了した。

新第2水槽室は853㎡で地下1階一部中2階からなっている。この水槽室は36の水槽をもち、中央部には直径7m正12角形的水槽があり群れをつくる小型回遊魚を入れ、また、造波装置を試作し、磯の生物が観察できる潮間帯水槽も新設した。この第2水槽室の完成で、昭和37年以来逐次

新築、改築を続けてきた当初の整備計画がひとまず完了した。

増改築にあたり、関係各位の多大のご尽力、ご支援をいただいたことに厚くお礼を申し上げます。

（理学部）



増改築された水族館第2水槽室（右側）

昭和56年度京都大学市民講座 講演要旨Ⅱ

風景の文化—都の名所—

人文科学研究所 教授 吉田 光 邦

日本人にとってこの風景は、客観的な存在する自然ではなく、つねに人間との交渉の上に成立するものであった。風景もまた文化のひとつとみられる所以である。

古く『万葉集』巻一には、有名な舒明天皇の国見の歌がある。その時大和の国は、うまし国と評価された。王者の立場からの風景である。これに対して『伊勢物語』には逍遥する人びとが描かれる。逍遥とは中国の古典『莊子』に由来する語である。天地の間を自由にとぶ楽しさ、それは個人の風景の成立であった。

新しく設定された平安京も、四神相応 山河襟帯という風景が必要な条件であった。四方の地勢を重視する考えは、中国では戦国策にみることができる。この条件は日本最初の庭作りの書として知られる『作庭記』にも、そのまま利用されている。

閉じられた都の文化のなかでの個人の風景の成立は、やがてその観念化を生む。観念として、イメージとしての風景の成立である。それは歌枕と

なり、最勝四天王院障子和歌（1207）、内裏名所百首（1215）などのように、絵画のなかに風景イメージを定着させ、定式化することになる。それが衣服や器物を飾る風景文様に展開するのも、当然の動きであった。

けれども江戸時代の安定状況に入ると、旅が新しい文化として登場する。都上りと江戸見物は大衆の夢となった。そして都の名所案内記が生まれる。最初の実用本『京羽二重』（1685）は、八景、十景、十境といった、中国の文人式の風景を導入した。文人の風景はこれまた観念の山水であったが、日本はそれを実体化しようと試みたのである。

案内記の発達はやがて貝原益軒の『京城勝覧』のように、16コース、全17日の観光モデルコースの設定にまで至る。それとならんで、絵画化によるイメージの大衆化として『都名所図会』（1780）が、名所図会のさきがけとなる。印刷技術の発達による、屏風絵の大衆化である。

そして明治、1860年のオルコックの富士登山、81年の日本アルプス命名と、異質の風景観が入りこみはじめた。そして志賀重昂の『日本風景論』は、風景を人間の文化から切り離し、客観的な自然そのものの美を世界に誇るべきものと強調した。そしてこの風景観が、以後の主流となった。風景は文化の領域から切り離されたのである。

（10月24日）

教育の底にあるもの

教育学部 教授 蜂 屋 慶

現在の教育の諸問題は、当面の対策を迫るとともに、より深く教育の本質をとらえ直すことの必要を訴えている。教育の底にあって、教育を成立たせているものを求めてみたい。

教育行為の機能は、その社会のもつ知識・技術・技能の再生産であり、教育行為の特色は、学習者の学習によって教育が成立することである。したがって、学習者の学習意欲、“やる気”が、教育行為の底にあって、教育を支えている。

伸びよう、学びとろう、とする学習者の意欲は、人間が自覚的存在であることに由来する。自覚とは、我が、我において、我を知ることである。自覚においては、我を省みることが、あるべき我を見通すことであり、あるべき我の実現に向う。ここから伸びようとする意欲が生まれる。あるべき我の実現に向わせるもの、それは、すべての我を包む“無”としての我、“我において”に示される、人間存在の根底にある“大きな生命力”とでも云うべき超越の世界である。しかも、我を知り、我を高めるには、内なる我を、外なる環境に表現すること—自己表現—によらなければならない。自己表現には、幼児の遊びにおける聖的と見

ることのできる自己表現、小学生から成人までに見られる主客分離の上でなされる俗的な自己表現、さらに、芸術家や宗教者に見られる、自分を通して底にある超越の世界が自己自身を表現する、聖的な自己表現の三つを指摘することができる。この自己表現の構造からも、学習者が自己表現を通して伸びる根底には、個々の人間を絶対的存在として認める超越の世界がある。人間を技術的存在としてのみ把握しているところに、現在の教育の盲点があるのではないか。“超越にふれさせること”を教育の目的に加えることが必要である。

人間は、技術的存在であるとともに超越的存在である。超越の世界にふれる方法には、(1)回心、(2)儀礼(象徴)、(3)遊び、(4)集団がある。学校教育において、生徒をして超越にふれさせるには、回心よりも、むしろ、超越の世界と共通する構造をもつ遊びを重視し、我を忘れて、自己表現に集中・没頭し、充実感を体験させることが必要である。また、集団活動を通して、人間の具体的^{せいの}生の場としての集団の無的性格にふれさせることを重視すべきである。超越の世界にふれて、現実の世界に立帰り、きびしく逞ましく生き抜く人間の育成に教育の原理を見出すことができる。

(10月24日)

<紹 介>

文学部 文学科

明治39年に哲学科をもって発足し、翌年に史学科を加えた京都帝国大学文科大学は、続く明治41年(1908年)に6講座より成る文学科を設けて、以来今日に及ぶ文学部(大正8年改称)の3学科体制を完成した。(以下今日の略称に従うならば)中文・独文・国文・英文・言語・梵文が設立時の文学科6講座であって、先立つ両学科におけると等しく、東洋文化の重視が特色とされる一方、「野に遺賢を求むる」教官登用が広く当時の視聴を集めた。国文に幸田露伴、英文に夏目漱石、といった構想は結局は実現しなかったにせよ、英文講座の初代教授に上田 敏を迎えたことなど、今日なお知る人ぞ知る語り草が数多い。

その後、国文・中文にそれぞれ第2講座が加わ

り、次いで仏文講座の開設を見た大正末葉には、文学科は7専攻、計9講座の規模に達した。昭和に入って英文第2講座が加えられたが、同講座を利用して13年には西洋古典学が独立の専攻科目となり、また15年には伊文講座の寄贈(原田積善会)があつて、ともに当該分野が本邦の大学に正規の地歩を占める先縦を画した。戦後は、学制改革を経て以降、西洋古典(28年)・米文(35年)・仏文第2(55年)の3講座が増設され、従って現在の文学科は計14講座、学部段階に関しては10「専攻」、から成っている。ただし、大学院(文学研究科、昭和28年発足)の平面では英米文が単一の専攻をなすため、学科全体の運営単位としてはむしろ、9つの通称「教室」(国文・中文・梵文・英米文・独文・仏文・伊文・西洋古典・言語)を挙げるのが実勢に則するであろう。

これら教室の多くは、それぞれ(教官個室とは

別に)専攻学生一般の利用に資する「研究室」をもつが、戦争直前に発端した国文研究室を例外として、研究室設置は昭和39年以降の近年に属する。他に、学科創設以来の古い歴史に係る文学科閲覧室が文学科書庫に隣って所在するとはいえ、正規の学生に加えて近年ことに数多い研修員、聴講生の在籍を思えば、この種の施設面における不充分は余りにも歴然である。にも拘わらず文学科の個々の研究室は、例えば『国語国文』・『中国文学報』・『アルビオン』等々の高度な専門学術誌の編集室ともなっているのは、文献学的厳密という共通の信条に立つ文学科全体が、誇りとする

に足る現況であろうか。

なお、文学部が「各学部一般共通講義」・「各学科共通講義」として通年開講する計11外国語(17種目)の授業は、ほとんどすべてが文学科の所管となっていて、文学科蔵書の幅はそれだけに一層多岐たらざるを得ない。収蔵余地の深刻な問題に当面する蔵書の中でも、特記すべきは物故教官その他の寄贈者名を冠した6種の特別文庫の存在であって、ことに和書における「頼原文庫」と洋書における「クラーク文庫」とが有名である。

(文学部)

学術講演会の開催

昭和56年度秋季学術講演会を下記のとおり開催します。本学教職員、学生の来聴を歓迎します。

記

講師 出口 勇 蔵 (本学名誉教授)
略歴

1909年生まれ。1933年京都帝国大学経済学部卒業。1948年京都大学経済学部教授。1957年～1958年および1967年～1968年京都大学経済学部長。1972年～1977年名城大学商学部教授。著書に『経済学と歴史意識』(1943年)、『マックスウェーバーの経済学方法論』

(1964年)、『社会思想史』(1967年)、『現代の経済学史』(1968年)等がある。経済学博士。京都薬科大学教授。

演題 社会科学の性格について

日時 昭和56年11月30日(月)午後3時30分から
場所 京大会館101号室 (学生部)

討 報

堀江 英一 (本学名誉教授・経済学博士)

11月3日逝去、68歳。本学経済学部卒。昭和32年本学経済学部教授就任、同51年退官。その間経済学部長(昭和39年～40年および同44年～45年)、評議員(昭和33年～36年および同48年～49年)を歴任。専門は経済史。

大枝 益賢 (本学名誉教授)

11月8日逝去、84歳。東京帝国大学農学部卒。昭和24年本学農学部教授就任、同35年退官。その間評議員(昭和29年～31年)を併任。昭和50年勲三等瑞宝章受章。専門は土地改良学。

日 誌

(1981年10月1日～10月31日)

10月5日 放射性同位元素等管理委員会
9日 アメリカ合衆国国際トウモロコシ・コムギ改良センターコムギ改良プロジェクトディレクター Norman E. Borlaug 氏来学、総長と懇談
11日 ドイツ連邦共和国 Max Planck 研究所事務総長 Dietrich Ranft 氏外2名来学、総長および関係教官と懇談(10月12日まで)
17日 京都大学市民講座第1日(第2日は10月24日、第3日は10月31日)
19日 インドネシア共和国 Shiah Kuala 大学学長 Ibrahim Hassan 氏来学、総長および関係教官と懇談

21日 国際交流委員会
23日 評議会
25日 タイ王国 Kasetsart 大学副学長 Krisna Chutima 氏来学、総長および関係教官と懇談ならびに学内施設見学(11月2日まで)
26日 チリ共和国 Catholic 大学副学長 Hernan Larrain 氏来学、総長および関係教官と懇談
28日 理学部附属瀬戸臨海実験所水族館第2水槽室落成披露式
〃 中華人民共和国中国科学院代表团団長 盧嘉錫氏(中国科学院院長)外8名来学、総長および関係教官と懇談
30日 基礎物理学研究所、理学部 故湯川秀樹名誉教授追悼行事(10月31日まで)
〃 カナダ Toronto 大学学長 James M. Ham 氏来学、総長と懇談

